

平成26年度病害虫発生予報第10号(1月予報)

<今月のコラム> ・菌核病の防除対策について
・冬春季野菜類におけるうどんこ病の防除対策について
・季節予報とは

<お知らせ> イネヨトウの性フェロモントラップへの誘殺数の推移について以下URLに掲載しています。
<http://www.pref.okinawa.jp/site/norin/byogaichubojou/documents/ineyo-phero.html>

今月のトピックス

菌核病 (レタス)

学名 : *Sclerotinia sclerotiorum*



発生ほ場



発病株



菌核から生じた子のう盤



菌核はほ場で長期生存

生態と被害

12月から3月の低温多湿時に発生する。初め地際部が水浸状に腐敗し、やがて株全体が軟腐する。腐敗部分には白色綿状の菌糸を生じる。菌糸は密になり、やがて黒色でネズミの糞状の菌核となる。菌核は土壤中で5年以上生存し、翌年以降の発生源となる。気温が20℃前後になると菌核上に淡褐色の子のう盤を1~7個形成する。発病は菌核から直接生じた菌糸によるものと、子のう盤上の子のう胞子の飛散によるものの2通りある。レタスの場合は前者が多い。防除対策については本号コラム参照。

<http://www.pref.okinawa.jp/site/norin/byogaichubojou/index.html>

I 1月の気象予報

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	30	40	20
平年並	40	40	40
低い(少ない)	30	20	40

(平成26年12月18日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

地点別の平年値

	平均気温(℃)	最高気温(℃)	最低気温(℃)	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	17.0	19.5	14.6	107.0	94.2
宮古群島(宮古島)	18.0	20.4	16.0	130.8	86.4
八重山群島(石垣島)	18.6	21.2	16.5	130.6	85.9

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

II 1月の発生予報概要

作物	病虫害名	発生量		
		沖縄群島	宮古群島	八重山群島
さとうきび	カンシャシクイハマキ	並	並	多
	イネヨトウ	並	—	多
シークワサー	かいよう病	やや多	—	—
	そうか病	やや多	—	—
タンカン	かいよう病	多	—	—
キャベツ	コナガ	並	—	—
かぼちゃ	うどんこ病	並	やや多	並
	タバココナジラミ	並	—	—
	ハモグリバエ類	—	多	—
きゅうり(施設)	うどんこ病	やや多	—	—
にがうり(施設)	うどんこ病	—	並	—
	斑点病	並	—	—
トマト	トマト黄化葉巻病	やや多	—	—
小ぎく (彼岸出荷用)	アザミウマ類	並	—	—

Ⅲ その他注意すべき病害虫等

※本文中では○(白丸)にて表記

作物	病害虫名	対象地域		
		沖縄群島	宮古群島	八重山群島
さとうきび	イネヨトウ		○	
	コガネムシ類幼虫 (アオドウガネ・ケブカアカチャコガネ)		○	
マンゴー	チャノキイロアザミウマ		○	
キャベツ	菌核病	○		
かぼちゃ	モザイク病	○		
きゅうり(施設)	べと病	○		
	ミナミキイロアザミウマ	○		
小ぎく (彼岸出荷用)	白さび病	○		

☆ 予報の見方 ☆

「発生程度」は平年との比較を示しています。そのため、毎年その月で高い数値が続いた場合には、その月の「発生程度」は密度が高くても「並」として発表されます。前月との多少の比較はグラフを参考にしてください。

◇ 一般的な病害虫防除対策について ◇

- a 多発すると防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努める。
- b 薬剤抵抗性害虫や薬剤耐性菌が発現しないようローテーション散布に努める。
- c 薬剤散布の際は、近隣作物へのドリフト(飛散)に注意する。
- d 防除効果を高めるため、むらのないよう丁寧に散布する。
- e 過繁茂を避け、透光通風を良くする。
- f 多湿にならないよう、圃場の排水をよくする。
- g 病原菌は雨水や風で伝搬されるので、ビニールの破れ等を補修する。
- h 発生源となる施設内外の雑草を除去する。

◆予報の見方◆

1. 予報の構成

- 1) 「注意すべき病害虫」：向こう1か月の間に多発生が懸念され警戒すべき病害虫や、例年その月に発生が問題となる病害虫
- 2) 「その他注意すべき病害虫等」：「注意すべき病害虫」ほどではないが、例年より発生が多い等注意を要する病害虫。本文中では、「○(白丸)」で表記されます。
- 3) 発生程度：向こう1か月の間に予想される発生量を示します。
- 4) 「コラム」：発生量に関係なく、季節的に防除を要する病害虫。
- 5) 予報の根拠：予報を推定した根拠を記載します。圃場巡回調査やフェロモントラップ等への誘殺状況等に基づく現在の発生状況、予想される気象条件が対象病害虫に及ぼす影響等について記載しています。
- 6) グラフ：予報根拠となる病害虫の発生推移等について示します。今年値を実線●(黒丸)で、平年値を…(破線)で示します。平年値からの工(縦線)は平年並の範囲を表します。
- 7) <防除上注意すべき事項>：防除を行う際に、注意すべき事項等について簡潔に記載しています。

2. 用語の基準とその使用法

1) 「発生量」の見方

平年値：過去5年～10年間の発生量の平均値

例年値：過去3年～4年間の発生量の平均値

発生量：原則として平年値からの差を「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階評価で予測します。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多」になっても見かけの密度は高くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少」でも見かけ上は多いと感じることがあります。

発生量	内容
平年並	平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや多・やや少	平年並の外側20%の度数の入る幅
多・少	上記3者の外側10%の度数の入る幅

平成26年度沖縄群島病害虫発生予報第10号(1月予報)

I 1月の気象予報

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	30	40	20
平年並	40	40	40
低い(少ない)	30	20	40

(平成26年12月18日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	17.0	19.5	14.6	107.0	94.2

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

II 1月の発生予報および防除上の注意事項

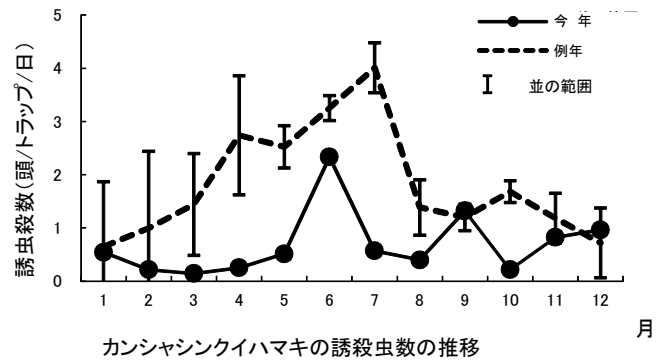
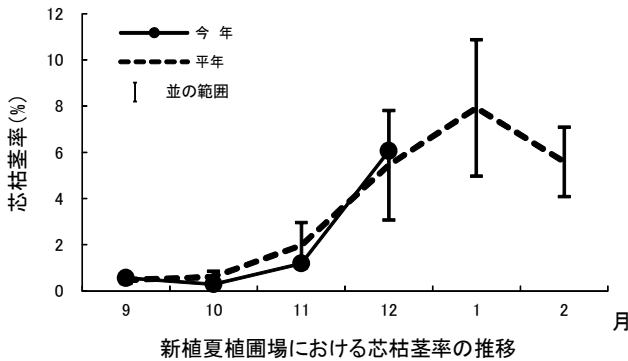
1 さとうきび

(1) カンシャシンクイハマキ

発生程度 : 並

予報の根拠

- a 12月中旬の調査の結果、新植夏植ほ場における芯枯茎率は6.1%(前年4.1%、平年5.4%)と平年並であった。
- b 12月のカンシャシンクイハマキ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は1.0頭(前年0.8頭、例年0.7頭)と例年並であった。



<防除上注意すべき事項>

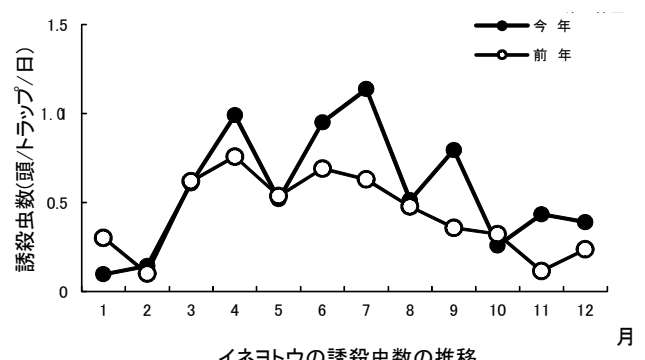
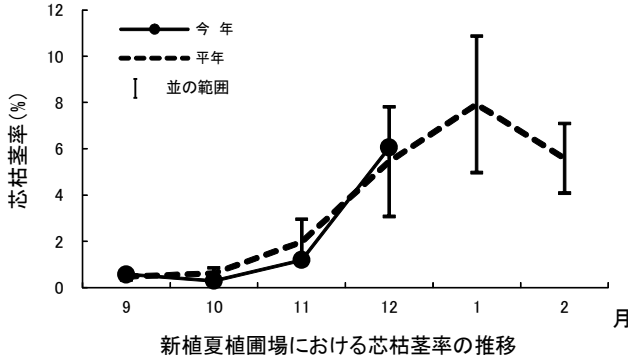
- a ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- b 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- c ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- d 乳剤の場合は、葉鞘内に葉液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の間散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- e 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- f 平成24年度病害虫発生予察技術情報第3号参照(平成24年6月11日付)。

(2) イネヨトウ

発生程度 : 並
予報の根拠

a 12月中旬の調査の結果、新植夏植ほ場における芯枯茎率は6.1%(前年4.1%、平年5.4%)と平年並であった。

b 12月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は0.4頭(前年0.2頭)であった。



<防除上注意すべき事項>

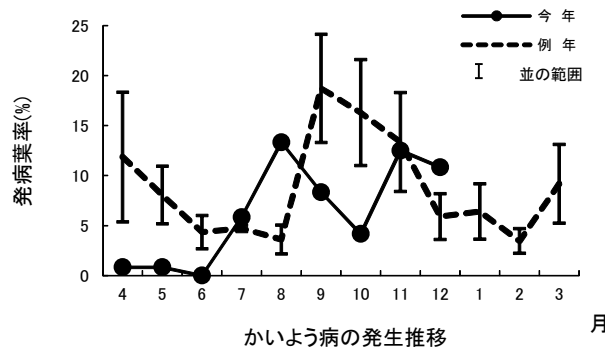
- a カンシャシクイハマキの防除上注意すべき事項を参照。
- b 平成26年度病害虫発生予報第6号(平成26年8月28日付)コラム参照。

2 シークワーサー

(1) かいよう病

発生程度 : やや多
予報の根拠

12月下旬の調査の結果、発病葉率は10.8%(前年6.7%、例年5.9%)と例年よりやや高かった。

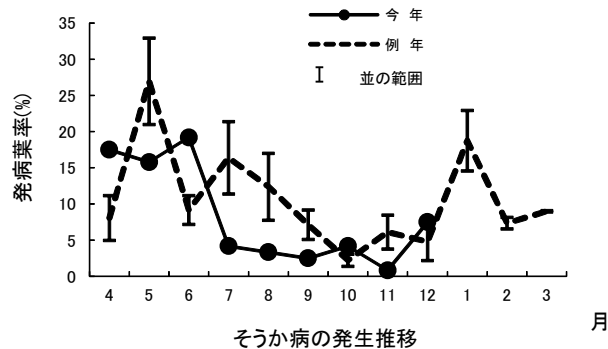


<防除上注意すべき事項>

- a 罹病した枝葉及び果実は、伝染源となるので除去する。
- b ミカンハモグリガの穿孔から病原菌が侵入しやすいので、同虫の防除を徹底する。

- (2) そうか病
 発生程度 : やや多
 予報の根拠

12月下旬の調査の結果、発病葉率は7.5%（前年2.5%、例年4.8%）と例年よりやや高かった。



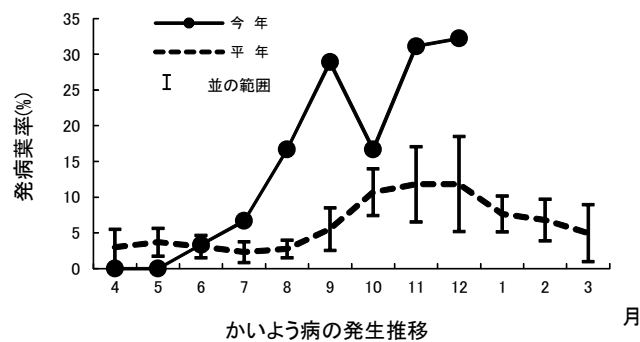
<防除上注意すべき事項>

- 本病は罹病葉・枝が伝染源となり、雨水によって伝搬される。
- 罹病葉・枝はできるだけ除去し、雨滴や露が早く乾くように園内の通風をよくする。
- 窒素肥料の過剰施用は軟弱な枝葉の発生を助長し、本病の発生を助長するので避ける。

3 タンカン

- (1) かいよう病
 発生程度 : 多
 予報の根拠

12月下旬の調査の結果、発病葉率は32.2%（前年6.7%、平年11.8%）と平年より高かった。



<防除上注意すべき事項>

- 罹病した枝葉及び果実は、伝染源となるので除去する。
- ミカンハモグリガの穿孔から病原菌が侵入しやすいので、同虫の防除を徹底する。

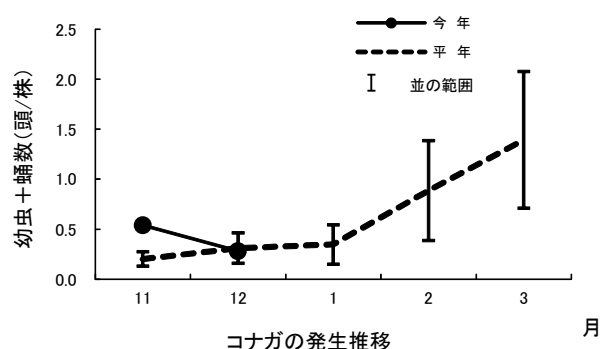
4 キャベツ

(1) コナガ

発生程度 : 並

予報の根拠

12月中旬の調査の結果、株当たり幼虫+蛹数は0.3頭(前年0頭、平年0.3頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- ほ場周辺のアブラナ科雑草の除去および収穫後の残さ処理を徹底し、ほ場管理に努める。
- 多発すると防除が困難になるので、低密度時に薬剤防除を行う。

○ 菌核病の防除対策

- 12月中旬の調査の結果、発病株率は0.04%(前年0%、平年0.03%)と平年並の発生であった。
- 発病株は菌核を生じないうちに除去し、ビニール袋に入れるなどして密閉処理し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 例年発生時期に当たるので、早期防除に努める。
- 本号表紙およびコラム参照。

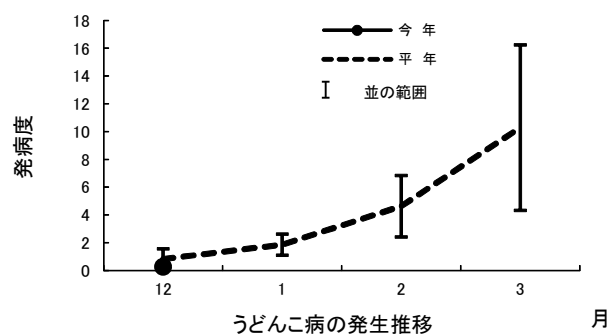
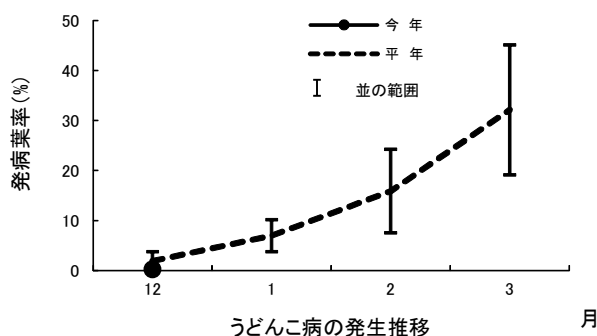
5 かぼちや

(1) うどんこ病

発生程度 : 並

予報の根拠

12月中旬の調査の結果、発病葉率は0.2%(前年0%、平年1.9%)、発病度は0.3(前年0、平年0.8)と、ともに平年並であった。

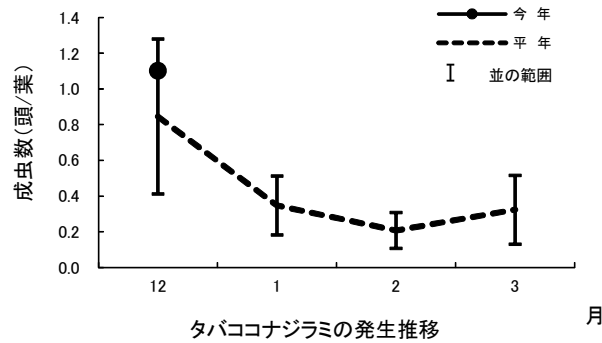


<防除上注意すべき事項>

- 発生源となる株元の不要な老葉・下葉を除去し、透光通風をよくする。
- 着果期以降、草勢の低下に伴い被害が急激に広がる場合があるので、防除を徹底する。

(2) タバココナジラミ
 発生程度 : 並
 予報の根拠

12月中旬の調査の結果、葉当たり成虫数は1.1頭(前年0.04頭、平年0.8頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- ほ場周辺の雑草は発生源になるので除草を行う。
- 本種は葉の白化を引き起こし、また、多発すると防除が困難になるので、葉裏を観察し早期防除に努める。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。また、薬剤抵抗性の発達しにくい気門封鎖剤や微生物農薬を使用する。

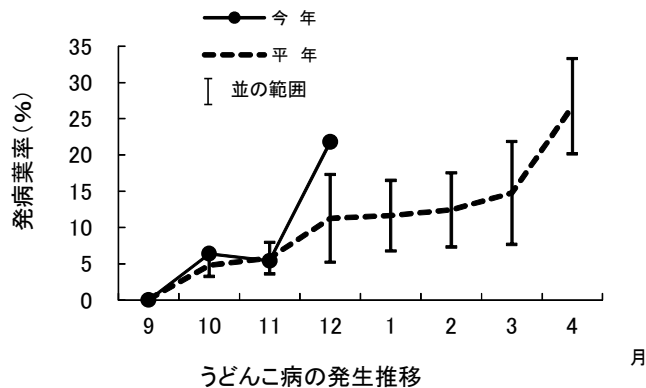
○ モザイク病の防除対策

- 12月中旬の調査の結果、モザイク病の発病株率は0.4%(前年0%、平年1.3%)と平年よりやや少なかった。
- 12月中旬の調査の結果、媒介虫であるアブラムシ類の葉当たり虫数は0.01頭(前年0頭、平年0.3頭)と平年よりやや少なかった。
- ほ場周辺の雑草はアブラムシ類の発生源になるので除草を行う。
- 発病株は発生源となるので、みつけ次第抜き取りビニール袋に入れるなどして密閉処理し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 本病は汁液伝染するので、ハサミや手の消毒、洗浄を行う。

6 きゅうり(施設)

(1) うどんこ病
 発生程度 : やや多
 予報の根拠

12月中旬の調査結果、発病葉率は21.8%(前年4.8%、平年11.3%)と平年よりやや高かった。



<防除上注意すべき事項>

老葉や病葉は発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして施設外に持ち出し処分し、透光通風を良くする。

- べと病の防除対策
 - a 12月中旬の調査結果、発病葉率は4.0%（前年0.2%、平年1.1%）と平年より高かったが、発生は一部施設に限られた。
 - b 密植や過繁茂を避け、透光・通風をよくする。
 - c 被害葉は施設内から持ち出し処分する。
 - d 多発すると防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努める。
- ミナミキイロアザミウマの防除対策
 - a 12月中旬の調査結果、葉当たり成虫数は0.1頭（前年0頭、平年0.1頭未満）と平年よりやや多かったが、一部施設で特に発生が多かった。
 - b 本種は灰白色斑紋病や黄化えそ病の媒介虫である。
 - c 施設周辺の雑草は本種の発生源となるので、除草を行う。
 - d 施設開口部には目合いの細かい防虫ネットを展張し、本種の侵入を防止する。
 - e 摘心や摘葉後の残渣は、本種の発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして密閉し、施設外に持ち出し処分する。
 - f 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

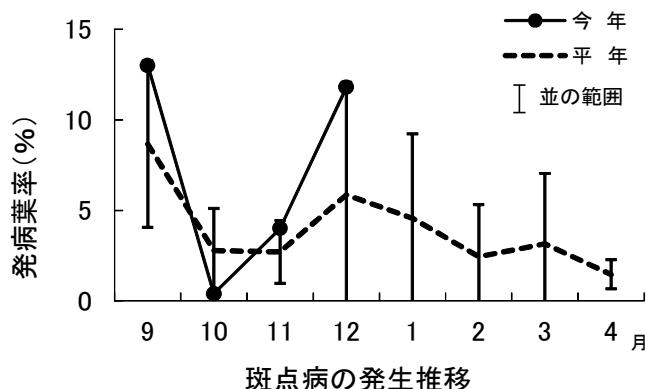
7 にながり(施設)

(1) 斑点病

発生程度 : 並

予報の根拠

12月中旬の調査の結果、発病葉率は11.8%（前年2.8%、平年5.9%）と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- a 老葉や病葉は発生源になるので除去し、ほ場外に持ち出して処分する。
- b 過繁茂を避け、透光通風を良くする。
- c 多湿にならないよう、施設内の換気に注意する。
- d 中～下位葉をよく観察し、初期発見・初期防除に努める。

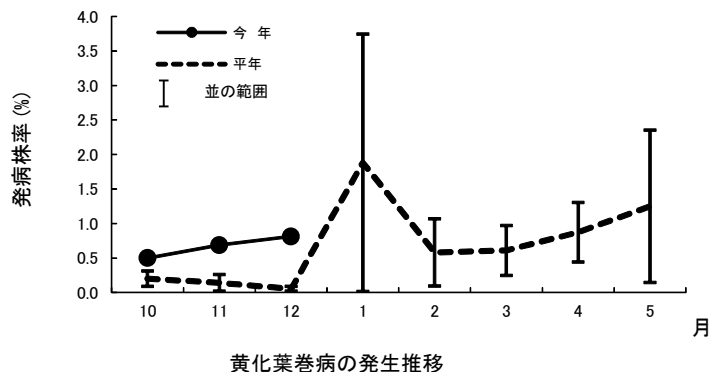
8 トマト

(1) トマト黄化葉巻病

発生程度： やや多

予報の根拠

12月下旬の調査の結果、発病株率は0.8%（前年0.1%、例年0.1未満）と平年より高かったが、発生は一部ほ場に限られた。



<防除上注意すべき事項>

- 発病株は感染源となるため、早急に抜き取る。抜き取った株は必ずビニール袋に入れるなどして密封し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 施設内外の野良生ネトマトは、本病の感染源および媒介虫であるタバココナジラミの発生源となるので、抜き取り密封処分する。
- 黄色粘着テープ等により、タバココナジラミの早期発見・早期防除に努める。
- タバココナジラミの薬剤防除を行う場合は、マルハナバチに影響の少ない薬剤を選定する。

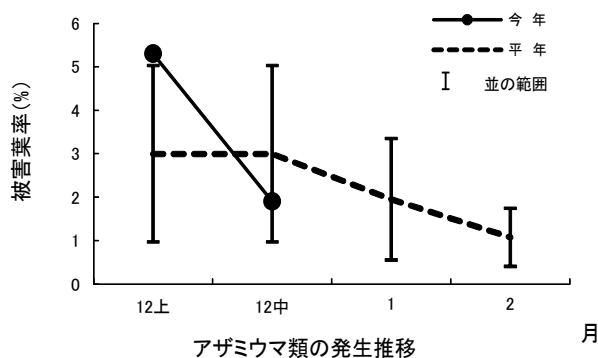
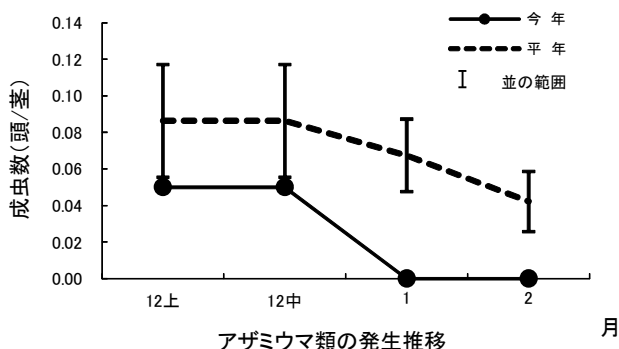
9 小ぎく(彼岸出荷用)

(1) アザミウマ類

発生程度： 並

予報の根拠

- 12月の調査の結果、茎当たり成虫数は上旬0.05頭、中旬0.05頭（前年0.17頭、平年0.09頭）と平年よりやや少なかった。
- 被害葉率は上旬5.3%、中旬1.9%（前年12.5%、平年3.0%）と上旬は平年よりやや多く、中旬は平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- 成虫は新葉や上位葉に、幼虫は上～中位葉の葉裏に多いことに留意しながら、丁寧に薬剤散布を行う。
- 同一ほ場内にあるキクは、異なる品種、異なる成長段階であっても、同時に防除を行う。
- 地際部から新しく出てきた脇芽は、アザミウマが増殖しやすいので、早めに除去する。
- ほ場内外の雑草や収穫終了ほ場の残さは発生源となるので、早めに除去する。

- 白さび病の防除対策
 - a 病虫害防除員の報告によると、本島北部の輪ギクで本病の発生が確認されている。
 - b 多湿条件下で発生するので、不要な下葉、脇芽は除去し、通風をよくする。
 - c 発病葉は除去し、ビニール袋に入れるなどしてほ場外に持ち出し、焼却などの処分を行う。
 - d 発生時期には予防散布を行うとともに、葉をよく観察し初期発生を見逃さない。
 - e 防除効果を高めるため、薬剤耐性菌が発現しないようローテーション散布を行う。
 - f 栽培終了後は近隣ほ場や次作の発生源にならないよう、不要な株は速やかに処分する。

平成26年度宮古群島病害虫発生予報第10号(1月予報)

I 1月の気象予報

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	30	40	20
平年並	40	40	40
低い(少ない)	30	20	40

(平成26年12月18日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
宮古群島(宮古島)	18.0	20.4	16.0	130.8	86.4

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

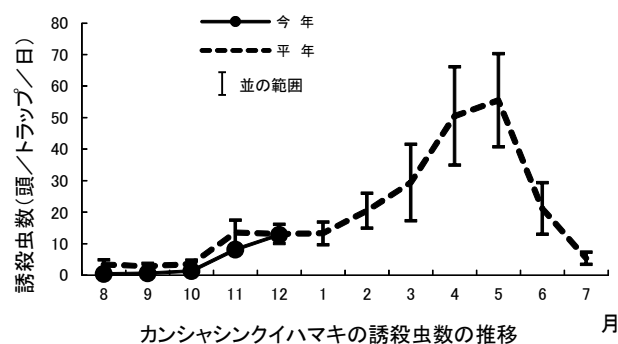
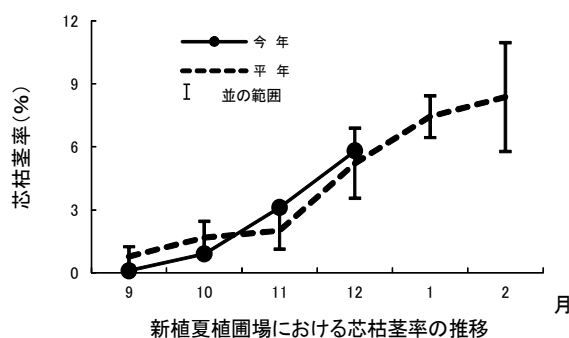
II 12月の発生予報および防除上の注意事項

1 さとうきび

(1) カンシャシンクイハマキ

発生程度 : 並
予報の根拠

- a 12月中旬の調査の結果、新植夏植ほ場における芯枯茎率は5.8%(前年2.3%、平年5.3%)と平年並であった。
- b 12月のカンシャシンクイハマキ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は12.8頭(前年16.4頭、平年13.1頭)と平年並であった。

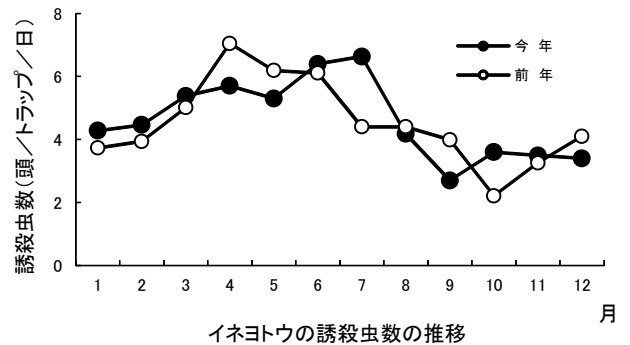
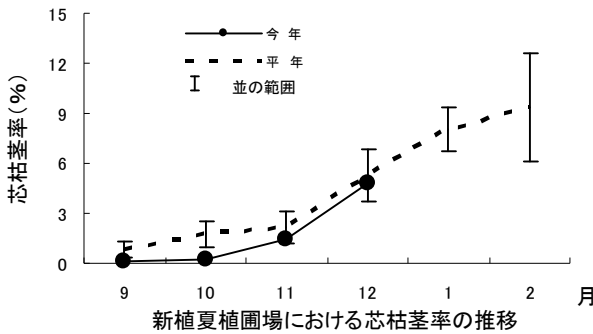


<防除上注意すべき事項>

- a ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- b 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- c ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- d 乳剤の場合は、葉鞘内に葉液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の間散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- e 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- f 平成24年度病害虫発生予察技術情報第3号参照(平成24年6月11日付)。

○ イネヨトウの防除対策

- a 12月中旬の調査の結果、新植夏植ほ場における芯枯茎率は5.8%(前年4.8%、平年5.2%)と平年並であった。
- b 12月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は3.4頭(前年4.1頭)であった。



<防除上注意すべき事項>

- a カンシャシクイハマキの防除上注意すべき事項を参照。
- b 平成25年度病害虫発生予報第6号(平成25年8月30日付)号コラム参照。

○ コガネムシ類幼虫(アオドウガネ・ケブカアカチャコガネ)の防除対策

- a 12月中・下旬の掘り取り調査の結果、アオドウガネの株当たり幼虫数は0.1頭(前年0.1頭、平年0.5頭)、ケブカアカチャコガネの株当たり幼虫数は0.1頭(前年0.1頭、平年0.7頭)と平年よりやや少なかった。
- b 立枯れがみられるほ場は早期に収穫し、収穫後は速やかに耕耘して、幼虫密度の低減を図る。

2 マンゴー

○ チャノキイロアザミウマの防除対策

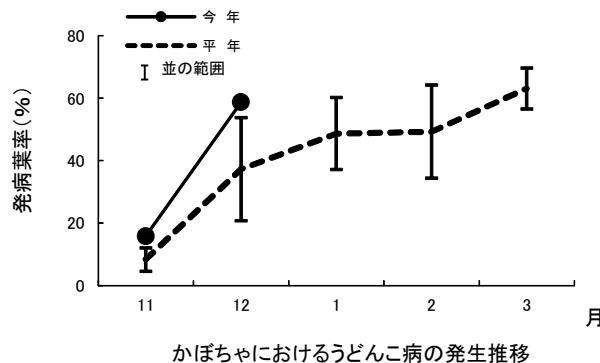
- a 12月中旬の調査の結果、一部ほ場で多発していた。
- b 不要な新葉を除去し、ビニール袋に入れるなどして施設外に持ち出し処分する。
- c 発生源となる施設内外の雑草を除去する。
- d 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

3 かぼちゃ

(1) うどんこ病

発生程度 : やや多
予報の根拠

12月中旬の調査の結果、発病葉率は58.7%(前年26.4%、平年37.2%)と平年よりやや高かった。

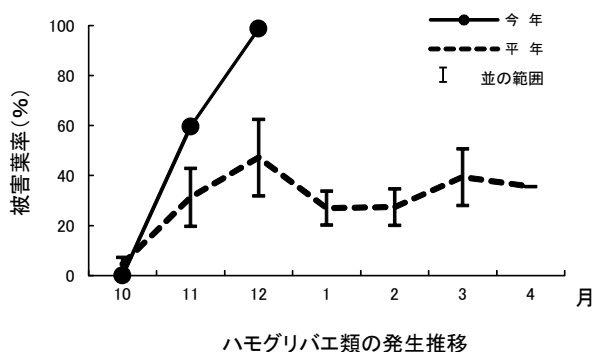


<防除上注意すべき事項>

- a 発生源となる株元の不要な老葉・下葉を除去し、透光通風をよくする。
- b 着果期以降、草勢の低下に伴い被害が急激に広がる場合があるので防除を徹底する。

(1) ハモグリバエ類
発生程度：多
予報の根拠

12月中旬の調査の結果、被害葉率は99.7%(前年54.8%、平年47.2%)と平年より高かった。



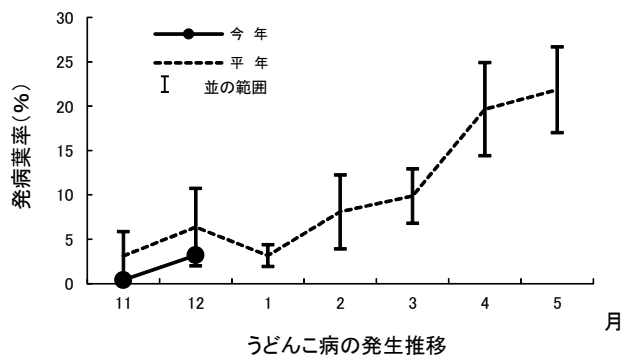
<防除上注意すべき事項>

- ほ場内外のウリ科・ナス科・マメ科などの雑草は発生源になることから、除去する。
- 幼虫期間が比較的短いため、葉の表面に産卵痕や食害痕がみられたら防除を開始する。
- 農薬やその他の防除資材の効果の判定は幼虫の体色で判定する。生存時の幼虫の体色は黄色で、死亡すると黒変する。

4 にかうり(施設)

(1) うどんこ病
発生程度：並
予報の根拠

12月中旬の調査の結果、発病葉率は3.2%(前年1.8%、平年6.4%)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- 発生源となる不要な老葉・下葉を除去し、透光通風をよくする。
- 除去した葉はほ場内に放置せず、ビニール袋等に入れるなどして持ち出し処分する。
- 薬剤防除は予防散布に重点をおく。

平成26年度八重山群島病害虫発生予報第10号(1月予報)

I 1月の気象予報

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	30	40	20
平年並	40	40	40
低い(少ない)	30	20	40

(平成26年12月18日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
八重山群島(石垣島)	18.6	21.2	16.5	130.6	85.9

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

II 1月の発生予報および防除上の注意事項

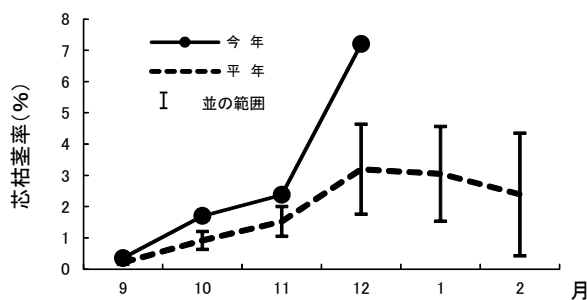
1 さとうきび

(1) カンシャシクイハマキ

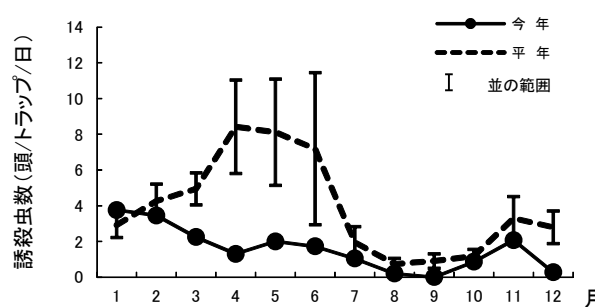
発生程度 : 多

予報の根拠

- 12月中旬の調査の結果、新植夏植ほ場における芯枯茎率は7.2%(前年10.6%、平年3.2%)と平年より高かった。
- 12月のカンシャシクイハマキ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は0.3頭(前年2.8頭、平年2.8頭)と平年より少なかった。
- 芯枯茎切開調査の結果、確認されたメイチュウ類幼虫のうち38%がカンシャシクイハマキであった。



新植夏植ほ場における芯枯茎率の推移



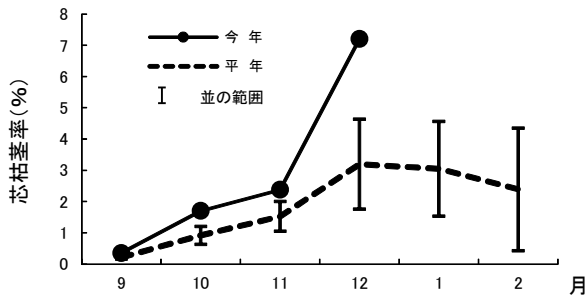
カンシャシクイハマキの誘殺虫数の推移

<防除上注意すべき事項>

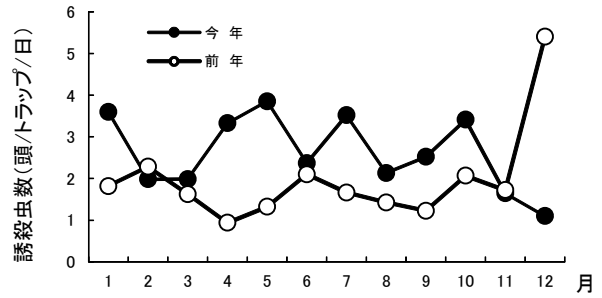
- ふ化した幼虫は、葉裏や葉梢部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- 乳剤の場合は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の間散布し降雨や散水等による溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- 平成24年度病害虫発生予察技術情報第3号参照(平成24年6月11日付)。

(2) イネヨトウ
発生程度 : 多
予報の根拠

- a 12月中旬の調査の結果、新植夏植ほ場における芯枯茎率は7.2% (前年10.6%、平年3.2%)と平年より高かった。
- b 12月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は1.1頭 (前年5.4頭)であった。
- c 切開調査の結果、確認されたメイチュウ類幼虫のうち62%がイネヨトウであった。



新植夏植ほ場における芯枯茎率の推移



イネヨトウの誘殺虫数の推移

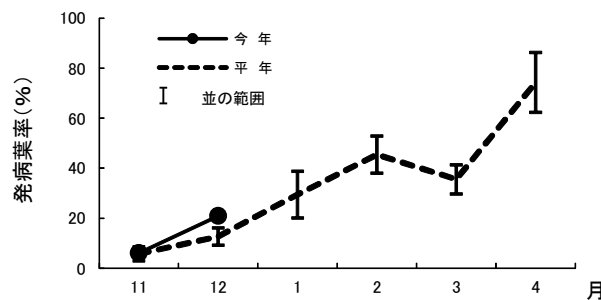
<防除上注意すべき事項>

- a カンシャシンクイハマキの防除上注意すべき事項を参照。
- b 平成26年度病害虫発生予報第6号(平成26年8月28日付)コラム参照。

2 かぼちゃ

(1) うどんこ病
発生程度 : 並
予報の根拠

12月中旬の調査の結果、発病葉率は20.9% (前年11.9%、平年12.6%)と平年よりやや高かったが、一部のほ場で特に発生が高かった。



うどんこ病の発生推移

<防除上注意すべき事項>

- a 発生源となる株元の不要な老葉・下葉を除去し、透光通風をよくする。
- b 着果期以降、草勢の低下に伴い被害が急激に広がる場合があるので防除を徹底する。

コラム①：菌核病の防除対策について

菌核病は12～3月にかけて多く発生します。初期被害を最小限に食い止めるため防除を徹底しましょう。

1 発生生態および被害

- (1) 多湿及び窒素過多は発病を助長する。
- (2) 病原菌は多犯性でキャベツ、ジャガイモ、さやいんげん、ピーマン等多くの作物を侵し、連作により多発する。
- (3) 密植や茎葉の繁茂時に発生しやすい。



さやいんげんの発病果



さやいんげんの地際部に生じた菌核



キャベツの発病株



ナスの発病果

2 防除上注意すべき事項

- (1) 発病部位は、菌核が形成される前に早めに除去し、ビニール袋に入れるなどしてほ場外へ持ち出し処分する。
- (2) 多湿条件で発生しやすいので、老葉病葉は取り除き透光通風を良くする。
- (3) 植替えを行う場合は、地際部の菌核を残さないよう土壌ごとほ場外へ持ち出し処分する。
- (4) 例年発生時期に当たるので、薬剤による防除を徹底する。

コラム②：冬春期野菜類におけるうどんこ病の防除対策について

例年乾燥したこの時期から、冬春期野菜類を中心にうどんこ病の被害がみられます。初期の防除対策は、その後の生育・収量に大きく影響を及ぼします。こまめに発生状況を確認し、下記の防除対策を徹底しましょう。

1 発生生態および被害

- (1) 乾燥条件で発生しやすい。
- (2) 病斑部に生じた分生子で伝染する。
- (3) 密植や茎葉の繁茂時に発生しやすい。



にがうりに発生したうどんこ病



ピーマンに発生したうどんこ病



きゅうりに発生したうどんこ病

2 防除上注意すべき事項

- (1) 発病源となる不要な老葉・下葉を除去し、透光通風をよくする。
- (2) 除去した葉はほ場内に放置せず、ビニール袋等に入れるなどして持ち出し処分する。
- (3) 薬剤防除は予防散布に重点をおく。

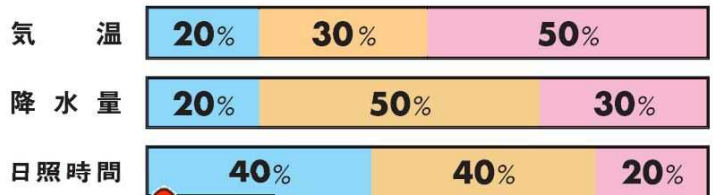
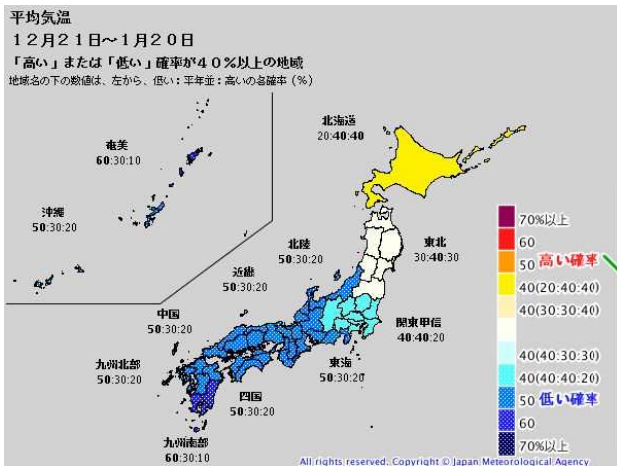
コラム③：季節予報とは

季節予報とは、天候等の大まかな傾向を予報するものです。1か月予報、3か月予報、暖候期予報および寒候期予報などがあり、これらは、1か月間あるいは3か月間などの平均的な気温や降水量などを「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級に分けて、それら3つの階級になるだろうと予想される確率を予報します。予報はそれぞれ定期的に発表しています。

季節予報の種類と予報要素など(沖縄地方)

種類	予報する期間	発表日時	予報する要素	数値予報モデル
1か月予報	発表日の翌々日から1か月	毎週木曜日 14時30分	1か月平均気温、第1週・第2週・第3～4週平均気温、1か月合計降水量、1か月合計日照時間	1か月アンサンブル予報モデル
3か月予報	発表月の翌月から3か月	毎月25日頃 14時	3か月と月ごとの平均気温、3か月と月ごとの合計降水量	季節アンサンブル予報モデル
暖候期予報	夏(6月～8月)と梅雨時期	毎年2月25日頃 14時	夏の平均気温、夏の合計降水量、梅雨時期(沖縄地方は5月～6月)の合計降水量	季節アンサンブル予報モデル
寒候期予報	冬(12～2月)	毎年9月25日頃 14時	冬の平均気温、冬の合計降水量	季節アンサンブル予報モデル

(※)5日～8日先を先頭の日とする7日間平均気温が「かなり高い」または「かなり低い」可能性が30%以上と予想される場合に発表する「異常天候早期警戒情報」も季節予報の1つです。原則として月曜日と木曜日の14時30分に発表しています。



気象庁マスコットキャラクターはれるん

季節予報は様々な社会・経済活動で利用されており、例えば、天候の影響を大きく受ける農業においては、栽培品種の選定、作付等の農事計画、収穫期の予測等に、また、製造業では商品の企画、原料・資材の手配、生産需給、販売計画等に活用されています。



季節予報は、営農計画、電力供給、製造・販売業などの様々な社会・経済活動に利用されています。

季節予報ってなに? http://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kisetsu_riyou/index.html

沖縄气象台提供

詳しくは下記へお問い合わせ下さい



沖縄県病害虫防除技術センター

ホームページアドレス

<http://www.pref.okinawa.jp/site/norin/byogaichubojou/index.html>

本 所	〒902-0072 那覇市字真地123 TEL 098-886-3880、098-886-0227 FAX 098-884-9119
宮古駐在	〒906-0012 宮古島市平良字西里2071-40(農研センター宮古島支所内) TEL 0980-73-2634 FAX 0980-72-6474
八重山駐在	〒907-0003 石垣市平得地底原1178-6(農研センター石垣支所内) TEL 0980-82-4933 FAX 0980-83-1157